闇の中で見る希望

奨励	月下 星志〔つきした・せいじ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団上鳥羽教会牧師

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。彼は光ではなく、光について証しをするために来た。その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

（ヨハネによる福音書　１章１―１８節）

「クリスマスということを知っているのだろうか」

もうすぐクリスマスです。この時期になりますと、スーパーやデパート、レストランにテーマパーク、街中のいたるところで、クリスマスの歌が聞こえてきます。たくさんあるクリスマスの歌の中で、私の好きな、と言いますか、改めてクリスマスって何だろうかと、考えさせられる歌があります。バンドエイドというバンドの「Do they know it's Christmas?」という歌です。この時期になると、いろいろなところでよく流れているので、聞いたことがある方もおられるかもしれません。

バンドエイドというのは、バンドというよりも、プロジェクトと言った方がよいかもしれません。80年代、アフリカのエチオピアで起きた飢餓を受けて、イギリスのミュージシャンが集い始まったプロジェクトです。音楽を通して、多くの人にメッセージを伝えていきました。現在も、メンバーが変わりながらも、このプロジェクトは継続されています。このバンドエイドの「Do they know it's Christmas?」という曲を受け、アメリカのミュージシャンで創られたのがUSA for Africaというプロジェクトの「We are the world」という曲です。こちらも有名な歌なので、聞いたことがある方もおられるかもしれません。「Do they know it's Christmas?」「彼らはクリスマスだということを知っているのだろうか」というタイトルだけで、私たちへストレートに響いてきます。クリスマスという響きだけで、わくわくしてきます。それは、子どもも大人も変わらないと思います。街では、大きなツリーや電飾が飾られ華やかになります。私たちは、温かい部屋で、共にクリスマスの喜びを祝うことができます。しかし、今こうしている間にも、多くの人が傷つき、悲しみの中におられます。先月起きましたフランスでの同時多発テロは、皆さんの記憶にも新しいと思います。そして、そのテロへの報復としてシリアへの空爆。憎しみが、新たに憎しみを生み、憎しみの連鎖が途切れることはありません。人類の歴史は、争いの歴史であり、常にどこかで戦争が起きています。東日本大震災から５年が経とうとしていますが、未だに復興が進まない地域があります。世界中で本当に多くの方が自然災害に見舞われ、今なお避難生活を強いられている方、不安や悲しみの中にある方がたくさんおられます。自然災害、戦争、飢餓等で、クリスマスどころではない方がたくさんおられると思います。先ほど紹介した歌の中に「今宵、きみは、どうにか難を逃れている」という歌詞があります。今私たちは、ここにいますが、もしかしたら、私たちがその現場の中にいたかもしれないのです。もしかしたら、この中にも、さまざまな事情で、クリスマスどころではないという人もおられるかもしれません。新聞やテレビの報道を見ていますと、悲しい出来事が多くあります。改めて、こうして当たり前に、楽しい時間を過ごしていることのありがたさを痛感すると共に、今なお悲しみの中にいる方がおられることをクリスマスのこの時を過ごすにあたり、覚えていくものでありたいと思わされます。ニュースにはならなくとも、私たちが住む地域にも困難な中にある人がおられます。トップニュースになることは、みんなが知り、みんなが心配します。ニュースにならないこと、あまりみんなに気付かれないこと、そのようなことに関心を向けていくものでありたいと思います。

イエスという希望の光

クリスマスという日、何の日かご存知でしょうか。クリスマスは、正確に言うと「イエスの誕生を祝う日」です。聖書には、イエスがいつ誕生したのか記されていません。かつて、ローマで太陽のお祭りがありました。昼と夜の時間が同じになり、昼の時間が少しずつ長くなっていきます。日が長くなっていく時に太陽の誕生を祝うお祭りでありました。初期の頃のキリスト教信仰者は、迫害の中で、闇のような困難な状況でも、心の太陽であるイエスの誕生を祝おうと特別な礼拝をしていたようです。このことから、クリスマスが１２月２５日になったと言われています。混沌とした闇のような世の中に、世の光として、希望として神が送ってくださったのが救い主イエスでした。そのイエスの生き方は、まさにみんなが関心を向けないような人に寄り添う生き方でした。イエスの誕生の時、イエスの元に来たのは誰でしょう。羊を相手にする仕事で、安息日を守ることができず罪人扱いされていた羊飼い。占星術を専門にし、周囲から「ヘンな人」扱いされていた、また、東方という外国からきた異邦人であった東方の学者たち。当時の社会の中で生きづらさを覚えていた人たちです。そのような人たちが誰よりも先に、イエスの誕生、最初のクリスマスをお祝いしたのです。その後も、イエスは多くの人が、関心を向けないような人、虐げられていた人に心を向け、声をかけていったのです。

光あれ

私たちが使う聖書。１番最初は旧約聖書の創世記、天地創造から始まります。創世記によりますと、神の言葉によって、この世界は造られていきます。水、空、植物、動物、人間、神の言葉によって、なったと記されています。その神が最初に言われた言葉。それは、「光あれ」でした。混沌とした世界、闇の中に「光あれ」と言われたのです。その言葉によって、暗闇の中に光が生まれました。聖書は、いつも多くの人を励ましてきました。迫害を受けてきた、戦争がある、災害がある。どうなるんだろうと、希望を見失いそうな状況にあっても、聖書は励まし続けるのでした。どんな状況にあっても「光あれ」と。さらに、旧約聖書は、厳しく、つらい歴史の中で、救い主が現れることを預言しています。そして、旧約聖書で預言された救い主がイエス・キリストです。聖書が語る言葉を、混沌とした闇が支配する世界の中で、人々は希望としていました。その希望が、幼子イエスの誕生を通して具体化されたのでした。聖書は分厚くいろいろ書かれていますが、聖書全体で示されるメッセージは、「いつもあなたと共にいる存在がいますよ」ということであるかと思います。そのメッセージを旧約聖書の時代、人々は、希望の光として生きていました。そして、新約聖書の時代から続く現在に至るまで、イエスの生き方を通して、「いつもあなたと共にいる存在がいますよ」という言葉は、生きた言葉として、多くの人に希望を与えてきたのでした。「誰かがいつもいっしょにいてくれる」。「誰かが自分のことを思ってくれる」。「誰かに愛されている」。人は、そのことで大きな安心感を得ることができます。クリスマスが近づくと、わくわくします。心躍ると言いますか、楽しくなりませんか。クリスマス、誰か大切な人と一緒に過ごしたいと思いませんか。クリスマス、それは神がイエスの誕生を通して、私たちと共にいる、一人ひとりを愛してくださっていることを示してくれている出来事なのだと思います。そこに、安心感を得、うれしくなるのだと思います。その神の愛を示す、生きた言葉として表されたイエスを、先ほど読んでいただきましたヨハネによる福音書は光として表現しています。「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」。神の言葉が、神の愛が光として、この世界に現れたのです。イエスは光として私たち一人ひとりを照らしてくださっているのです。この１年を振り返りますと、本当に悲しい出来事、どうなるのかと思う出来事がたくさんありました。来年もどうなるのかと思わされます。それでも、必ず光は射しています。光は導いてくれます。私の属する教会では、クリスマスになるとロウソクを使います。真っ暗な闇の中でロウソクの光を照らすと、小さな光なのに本当に明るくなります。１人ずつ点火していくと、ゆっくりと明るくなっていきます。絶望するような闇のような状況にあるとすぐに明るくなる大きな光、希望を求めてしまうかもしれません。しかし、本当に必要なのは、小さくとも、確かに光るものだと思います。何かを解決しようと思っても、劇的に状況が変化する魔法はありません。小さなゆっくりとした、それでいて確実な光が大切であると思います。小さな確かな光を希望とし、今なお困難な中におられる方たちのことを心に刻み、クリスマスの時を過ごすことができればと思います。

２０１５年１２月１６日　京田辺水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録